



貨幣経済の研究

北岡, 孝義

(Degree)

博士 (経済学)

(Date of Degree)

1990-03-07

(Date of Publication)

2008-05-02

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

乙1403

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2001403>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



氏名・(本籍)	北 岡 孝 義 (大阪府)
学位の種類	経済学博士
学位記番号	経博ろ第78号
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位授与の日付	平成2年3月7日
学位論文題目	貨幣経済の研究

審査委員	主査 教授 斎藤光雄
	教授 三木谷良一 教授 豊田利久

論文内容の要旨

本研究の意図は、最新の経済学的方法にもとづいて貨幣経済の現代的把握を行なうことにある。

本論文は9章よりなる。前半の4章は貨幣の本質に関する理論的研究である。第1, 2章は貨幣需要をとりあげ、第3, 4章は貨幣供給を扱う。後半の5章は貨幣の価値に関する理論的実証的研究である。主として、金融政策のマクロ経済学的効果に関する最新の学界の成果を問題とする。

第1章「不完全市場と貨幣」は、貨幣経済のミクロ経済学的基礎の問題をとりあげ、1970年代以降この分野で展開された諸理論の整理・検討を行なう。主たる論旨は、貨幣の存在は、一方で市場の組織化と取引費用の軽減に貢献するが、他方で、不均衡経済の存在の根拠となるというものである。相対的取引対多角的取引、取引費用、不均衡分析等の現代的理論の成果が貨幣経済の特徴づけに応用されている。

第2章「取引費用と資産選択」は、貨幣需要の本質である流動性を理論的に分析する。通常、貨幣がもつ100%の流動性の根拠として、それが安全資産(収益率が確実であること)である点が挙げられる。著者は、それに加えて貨幣は換金する必要がなく、その意味で取引費用がゼロである点を強調する。

第3章と第4章は、信用貨幣、すなわち物的裏付けを持たない紙幣(fiat money)の本質を分析する。このため、銀行が独自の貨幣を競争的に発行し、その結果公衆の信認の異なる種々の貨幣が流通する経済を考察する。この競争的貨幣供給制度の発想は Hayek に由来するが、そのモデル化は、B.Klein の論文(1977)が先駆的である。第3章「競争的貨幣供給システム」では、静学的均衡において信認の低い貨幣が信認の高い貨幣と並んで流通するためには、利子を付することが必要なこ

とを明らかにする。

第4章「反グレンシャムの法則」では、著者独自の分析を展開する。すなわち、前章のモデルを動学化することによって、信認の高い貨幣が信認の低い貨幣を駆逐するいわば反グレンシャムの法則が成立することを示す。この論証にもとづき、現行貨幣制度に一つの解釈を与える。すなわち、現代の管理通貨制度では、政府が保証する（信認が最高である）中央銀行貨幣が流通する。その結果、私的銀行の貨幣がすべて駆逐されるが、これが現行制度であるとみなす。

第5章と第6章は貨幣の価値、すなわちインフレーションを扱う。とくに、焦点を、最近の学界のトピックである、一般物価上昇率、一般物価上昇率の変動、および相対価格の3者の関係におく。第5章「一般物価上昇率の変動について」では、まず従来諸説を2つのモデル、情報ベース・マクロモデルおよび契約ベース・マクロモデルの形で集約的に表現する。前者はLucas (1972, 73), Sargent-Wallace (1975), Barro (1976) の説に沿うモデルであり、後者はTaylor (1980) により提唱されたモデルである。著者はこの両モデルを統合した統合マクロモデルを提示する。

第6章「競売市場と顧客市場」では、この統合マクロモデルを日本の産業別卸売物価および耐久・非耐久消費財物価について実証的に推定する。実証の方法は、ほぼBarro (1976) によっているが、競売（均衡）市場と顧客（不均衡）市場の2つの市場に分類して実証研究を行なう点は、著者の新しい着想によるものである。推定の結果、日本の市場は大半が契約ベース・マクロモデルが妥当する顧客市場であると結論する。このことは、合理的期待論者のモデルが、日本の大多数の市場で妥当しないことを示唆する。

第7章「スタグフレーションと金融政策」は金融政策とインフレーション、スタグフレーション、および失業の関係をマクロモデルにより分析する。モデルは、Dornbusch-Fischer モデルを出発点とするが、著者はこのモデルに資源価格の変化の影響を加えることにより、スタグフレーションの可能性が生じることを示す。さらに、フィリップス曲線における期待係数（期待インフレ率の係数）を物価の変化率の関数とするモデルを展開し、政府の過度の貨幣拡張政策はスタグフレーションを招くこと、および適度の貨幣拡張政策は失業率を減少させることを明らかにする。

第8、9章は金融政策でしばしば論議される中間目標（例えば、金利または貨幣供給率）と最終目標（たとえばGNP）の関係を分析する。マネーサプライ（または金利）を目標値として金融政策を行なうことが、GNPの安定化に対してどの程度有効性を持つかという問題である。この問題はPoole (1970) の研究が端緒である。第8章「中間目標政策の最適性」は中間目標の達成が最終目標の達成に対してどの程度まで効果的であるかに関して、一般論を展開する。もっとも効果的であることを最適性と呼ぶが、このような最適性は非常に特殊な場合しか得られないことが示される。

第9章「中間目標変数の選択問題」では、著者は、中間目標の選択に関して一つの新しい選択基準を提案する。その基準とは、もし、ある中間目標変数が、他の中間目標変数よりも、最終目標達成までに存在する攪乱要因についてより多くの情報を与えてくれるならば、この中間目標変数を選択すべきであるということである。これは、中間目標達成のさいに得られた情報が、その後最終目標達成までの政策調整に利用しうるか否かという観点を選択基準に加えたことになる。例示として、この基準

を簡単なIS-LMモデルに応用し、マネーサプライ目標が金利目標より優れた中間目標になるための条件を導いている。

論文審査の結果の要旨

本論文の貢献を以下に列記する。

(1) 本論文は貨幣経済のきわめて基本的な問題を、最新の理論経済学の角度から分析し整理している。その意味で、本書はもっとも現代的な金融理論の一体系を読者に提供している。問題の中には、金融論専門家からみれば非常に抽象的なものをも含んでいるが、それだけにこれらを本論文のように幅広く、系統的に論じた研究はきわめて少ない。

(2) 各題目について、非常に詳細な文献の研究が行われており、その結果をきわめて明せきな展望の形でまとめている。

(3) 各題目について、著者独自の貢献を加えている。とくに、競争的貨幣供給システムの数学的モデルの構成（第3、4章）、競売市場と顧客市場を対立させた実証研究（第6章）は著者の優れた獨創性を示している。

ただし、本論文にも望むべき点を数えることができる。

(1) 全般的に国内通貨の問題に終始している。現代経済における重要性からいって、国際通貨の問題、ないしそれとの関連の論述が望まれる。

(2) 貨幣の機能、存在の意義については、古典派経済学以来の学說的蓄積がある。これと著者の現代的理論との関係に関する論述を加えることが望まれる。

上記を総合して、本論文が貨幣経済論における大きな貢献であることは明白である。よって、審査委員は一致して、本論文の提出者が経済学博士の学位を授与される資格をもつものと判定する。